

# 異文化と 心通わせ

68

村田 佳子



センター試験が行われ 次の日、電車でこんなことがありました。比較的すいている電車の入り口近くに座り本を読んでいると、次の駅でフレザーの制服を着た男子高校生が2人、話をしながら乗ってききました。席が空いているのに座らず立ちまはなかつたのですが、2

人が私の頭上近くで話しているのを聞かえてしまっていたので聞かえてしまっていました。彼らは前日にセンター試験を受験したようでした。「あいつ、国語160点だった」「まじで。」「あいつ受かっちゃうんじゃね?」「かも」「あいつ、私立は?」「早稲田と立教だった」「まじかよ。あいつ...」。しば



らく彼らはそこにいない「あいつ」のことを話していました。そんな話題にされる「あいつ」はどんな人の1人です。さびやかな雰囲気を持っていました。話すと女優の桃井かおりに似ています。とるえ方は中立的で伝え方はストレートです。さびやかな雰囲気にかけてくれ、話したこともよく覚えていたのです。

## うらやましいと思う気持ちとの付き合い方

「あいつ」のことを話していました。そんな話題にされる「あいつ」はどんな人の1人です。さびやかな雰囲気を持っていました。話すと女優の桃井かおりに似ています。とるえ方は中立的で伝え方はストレートです。さびやかな雰囲気にかけてくれ、話したこともよく覚えていたのです。

その日も昨日なんか、言っていたじゃないか。役者に立つかなと思つたから、これあげる」とだけ言つてボソッと小冊子を私の机に置いていってくれたのです。すぐに片付けなければいけない仕事を済ませた後、その小冊子を開いてみました(なんだろっ?)。するとそこには外国の物語がイラストとともに書いてありました。お話には「灯台とランプ」というものでした。同じ「明かりを灯す」という点で共通した仕事をしている、灯台とランプ、それぞれの絵に顔が

活躍を眺めうらやましく思い、ちょっといいけていたランプ。そんなある日、海岸で男の子がいななくなつてしまいました。その男の子の家族は灯台守とともにあたりを探しましたが男の子は見つかりません。そしてあたりはどんどん暗くなつてしまいましたが、すると灯台守はランプに言いました。「さあ、君の出番だ」。ランプは男の子の家族の足元を照らし、一生懸命仕事をしました。そして男の子は無事に見つかりました。

昔、私も国際協力の分野で活躍しているある女性の記事を見てあてがれとは異なる、うらやましいよつな気持ちを抱いたことがあります。

私のお話を読んで、気持ちが染まりました。役割はみんな違う。それから人々をうらやましいと思ふ気持ちが全くなくなつたわけではありませんが、人は土儀や使命が違ふとどうことを知るのには、そのときの私にとって必要なことでした。「うらやましいと思ふ気持ちがわいてくるとき」というのは、「自分の役割をこなすようになったとき」のサインなのかもしれませ

その女性は経験も能力も素晴らしい私など足元にも灯台のダイナミックなグニステムズ

その女性は経験も能力も素晴らしい私など足元にも灯台のダイナミックなグニステムズ

その女性は経験も能力も素晴らしい私など足元にも灯台のダイナミックなグニステムズ

その女性は経験も能力も素晴らしい私など足元にも灯台のダイナミックなグニステムズ